

図書館員の四季：私のシネマ探訪

地球交響曲
(ガイアシンフォニー)

大阪通信病院
浦谷 圭子

一本のトマトの木に、1万3千個もの実がなるのを知っていますか？

『地球交響曲(ガイアシンフォニー)』は、“今生きている我々一人一人が、心にどんな未来を描くかによって、現実の地球の未来が決ってくる。” そんな訴えを込めたドキュメンタリー映画です。

たった一粒のごく普通の種から、真っ赤なトマトが見事に鈴なりになるまでを、カメラが克明に追い、また、密猟者のために孤児になった象の赤ちゃんが、愛情を確認するかのよう、飼育員の体を鼻で触れながら、ミルクを飲む愛らしい姿を写しだします。

そして、そんな美しい映像と音楽の中で、常識を超えるようなことを体験した人々が、淡々とメッセージを語りかけてくれます。

『トマトは心を持っている。私はそのトマトの心に尋ね、トマトに教わりながら成長の手助けをただけなんです』という言葉、動物孤児院の運営者の『地球はそれ自体が一つの生き物だ。一つの種の絶滅は自分の指を切ったり失ったりするのと同じことだ。もうそのことに気づくべき時がきている。・・・象は、自分たちの牙がもたらす悲劇を知っていて、それでも人間を愛してくれているんです』が心に響きます。

各地で自主上映会が延々と続き、ミニシアターでも上映されています。不思議な感動を与えてくれ、心が元気になる映画です。一度体験して、地球のことを考えてみませんか。

『おもひでぼろぼろ』

藍野学院短期大学
松原 康子

—私は、ワタシと旅にでる—というキャッチフレーズにひかれ、数年前の夏、一人で見ていった映画が『おもひでぼろぼろ』である。27歳の主人公タエコが小学校5年生のころの自分と一緒に“自分さがし”の心の旅に出て、自己を見つめ、新たな第一歩を踏み出すまでの過程を描いた映画だった。

宮崎駿のアニメーション映画をすべて見ているわけではないが、これまでにない大人の映画だと思った。見始めのころは主人公の顔にできる変なしわ(記憶では、リアルさを出すため表情筋を描くという試みによる)が妙に気になり、「全然かわいくない」とつぶやいていた。しかし、たちまちストーリーに引き込まれた。俳優の今井美樹、柳葉敏郎の声優ぶりも新鮮だった。

当時、私は主人公とおない年で、同じように仕事や結婚について周りの声に揺らぎ、いやでも自分と向き合わなければならず、ちょっとしんどい状況にあった。主人公が特別な美人ではなく、地味なOLということもあってしんみりと共感できた。

タエコが言った。『分数の割算がすんなりとできた子は、その後の人生も順調にいくらしい』タエコは、ただひっくり返してかければいいという姉のことばに納得できず首をかしげる子だったのである。そういう自分に納得できないことにこだわる心を27歳になっても失わず、要領悪く生きているタエコの誠実さが好きだ。

映画の終わりは、農業にこだわる年下の青年トシオとの明るい未来を予感させる。あのころの追い詰められた心境の私を、明るい気持ちにさせてくれた映画である。